

本書には結論めいた「結び」も、将来の見通しを語る「展望」もない。目撃者は見たこと、聞いたことを述べるだけでよいのである。また時間の取り方によっては、今後のベトナムにおいては全てが起りうる可能性があるからである。

二〇年の歩みを検討してみても明らかになったことは、ドイモイの成功、世界市場への復帰によって、ベトナムが今また新たな転機に立っていることである。新たな挑戦に直面していると言つてもいい。しかも今度の挑戦は「敵が存在した」これまでのものとは種類を異にする。敵が見えないのである。

ベトナムにおける革命と統一および建設の事業を独占的に指導してきたベトナム共産党は、苦い勝利ではあつたが、これらの事業に成功する過程で自らの組織を肥大化してしまつた。今や党は国家さえも呑み込んで、党官僚国家を形成している。党官僚は自己の地位保全のためであれば、対外開放やドイモイですら自ら発動するほどに開明的であつた。革命や建設の事業に民衆を動員するためには、ある程度民衆の意思を尊重する融通性もあつた。しかしこれらの柔軟性はドイモイに成功し、党や国家が肥大化してくるにつれて失われている。ドイモイの次の国家目標たる工業化、近代化の障害になつているのは、事業の推進者たる党官僚国家自身である。敵が見え

ないはずである。ベトナムが直面している挑戦の新しいさと困難を指摘しないわけにはいかない。

「アジア各国現代史の諸問題」研究会に参加したものの、ベトナムの現代史をまとめるのは気が重く、執筆に手間取った。アジア経済研究所に多大の迷惑をお掛けした。あらためてお詫びとその寛恕に対して感謝の言葉を述べたい。

ベトナムで起こった有為転変を消化し切れず、一向に執筆に取り掛かろうとしない筆者を督促し、このような形の書物をどうにかまとめ上げさせたのは、研究会仲間である浅野幸穂、竹下秀邦、浜勝彦の諸氏である。諸氏は原稿のチェック、コメントはもちろん編集の領域においても援助を惜しまなかった。諸氏の友情と学恩に感謝する。

執筆に際してはまた、研究所のベトナム研究グループ、村野勉、糸賀滋、出井富美、石田曉恵、竹内郁雄、寺本実の諸氏に色々とお世話になった。本書は資料の面で、村野氏がこの一〇年間執筆してきた『アジア動向年報』に全面的に依拠した。村野氏には年報の日誌や資料の日本語訳を使用させて頂いたことに感謝の意を表したい。寺本氏には原稿のチェックや整理を手伝って頂いた。

研究所内での編集総括の労をとられた木村陸男氏、編集制作の労を執られたアジア経済出版会の鳥谷尾克男氏にも厚くお礼申し上げます。

最後に、今回もまた本書作成に協力してくれた妻信子に感謝する。

一九九六年三月七日

筆者